



投稿したくなる論文誌を目指して

ヒューマンインタフェース学会 論文誌委員会委員長
加藤 博一

ヒューマンインタフェース学会は、小さな学会である。論文誌の発行部数も、大きな学会のそれとは比較にならない程少ない。一方、論文の採択率に関しても、それほど高くはなく、むしろ厳しい方である。しかし、ヒューマンインタフェースに関する話題を取り扱う論文誌が数多くあるにもかかわらず、ヒューマンインタフェース学会論文誌への投稿数は確実に増えてきている。

論文編集の中で最も重要な手続きが査読である。査読は公平かつ適正に行わなければならないが、分野の異なる論文の査読は容易ではない。特に、新規性の判定は困難を極める。このことにより、一般的には、査読が真に適正な査読者によって行われる場合より、分野の異なる査読者によって行われる場合の方が採録されやすい傾向にあると思われる。また逆に、査読者に論文の価値を理解してもらえず、貴重な論文が不採録となることもあるだろう。ヒューマンインタフェース学会のような対象分野を絞っている小さな学会においては、査読も本当にその分野に精通している方に担当いただくことが可能で、このような問題が起きにくいと思われる。投稿者の立場からすると、投稿した論文は採録されてほしいものだが、なにより公平かつ適正な査読が行われることが最も重要なのは明らかだろう。

ヒューマンインタフェース学会では、論文誌編集作業に関して、常にその改善に努めている。査読手続きの迅速化に関しては、平均値としては6ヶ月を切る値を実現しているが、例外的にかなりの時間を要しているものもある。このような例外をなくすための編集プロセスの改善は今年度中に行いたい。また、電子メールやウェブを利用した、投稿・査読手続きの電子化、論文誌のオンライン化に関しては、同様に電子化を目指している他の委員会と共同で、現在システムの構築を進めているところである。

しかし、上にも述べたように、論文誌にとって最も重要なのは、投稿された論文の中から価値のあるものを漏れなく、かつ、不適当なものを除外して掲載することと私は考えている。そのためには査読の質の向上が重要である。また、不適当な論文に関しても単に切り捨てるだけではなく、問題点を明確に示し、著者に改善する機会を与え、再投稿の意欲を持たせることも重要である。

現在ヒューマンインタフェース学会では、メタレビューア制をとっており、編集委員会内で担当編集委員を決め、担当編集委員がメタレビューアとして査読者を決める。つまり、担当編集委員と論文のマッチングが非常に重要である。今回、論文誌編集委員長となり、担当編集委員の割り当てに関する責任を負うこととなり、改めてその重要性を認識し、できる限りの慎重さを持って取り組んでいるところである。

私の現在の関心事は、この論文と担当編集委員のマッチングに関して、その度合いを最大限に高めることである。これには、投稿された論文の専門分野を正確に把握することが、まず重要である。現状の投稿手続きにおいては、このために有効な情報が論文誌編集委員会に十分に届いているとは必ずしもいえず、改善を図りたいと考えている。また、投稿者に査読者名を公表することはできないが、メタレビューアとなる論文誌編集委員会委員の名前は公開されている。ここに、各委員がどのような分野を専門としているのかといった情報や業績リストなどを付記することで、投稿者にとっても、安心して投稿できる（査読を任せられる）論文誌になるのではないかと考えている。また、できる限り広い範囲の分野をカバーできるように編集委員会の構成、および各編集委員のメタレビューアとしてのスキルアップにも努めていかなければならない。

いろいろと取り組みたい課題も多いが、1年という任期でどこまで手を付けることができるかはわからない。しかし、少なくとも投稿数が増えることのないよう、投稿したくなる論文誌を目指して努力を重ねたいと思う。